



Title	懐徳堂研究の新刊紹介
Author(s)	
Citation	懐徳. 1986, 55, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90667
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

る。誠をその核心におく『中庸』の權威を文献学的にうらづけようとした彼の仕事そのものが、なにより誠の擡頭の象徴的な意味を十分持つものであったのである。

そして筆者は、こうした誠を倫理の基本とする傾向の顕著に現れてきた時代が、至誠に生きることをひたすら理想とする志士たちの活躍した幕末に先行したこと、その上、その誠が、幕末の志士にみるような革命的性格をもつものではなく、日常的なレベルでの、他者に対する無私性の行為における実現を求めたものであったことは、注目されなければならない、と主張する。

(竹田健一)

懷徳堂研究の新刊紹介

懷徳堂の研究は、最近の記念会や友の会の活動もあってか、かなり進んでいます。『懷徳』五三号に寄稿されたシカゴ大学のテソオ・ナジタ氏の懷徳堂研究も本としてまとまり、目下印刷中で近く刊行される運びになっています。また大阪大学に留学中の上海・復旦大学の陶徳氏もこれを研究の主題とされています。国際的にも大阪が生んだ学問・思想が問われていると申してよいかと思えます。

さて、このような状況のなかで、懷徳堂と大阪の研究にとって、関係の深い書物が刊行されました。

水田紀久『近世浪華学芸史談』（中尾松泉堂書店刊 B五版

六五二頁 定価六千円）

水田氏はご存じの方も多い近世上方学芸のすぐれた研究者ですが、本年、還暦をお迎えになり、それを記念して、かねて書かれた文章を集められました。わりあい小品が多いのですが、懷徳堂はもちろん泊園書院・混沌詩社・梅花社がとりあげられ、仲基・蟠桃・兼葭堂・三島などについて記されています。それらは新資料を紹介しながら、その主人公をうかがいあがらせるなど、なかなか教えられるところの多いものです。含翠堂のことは、私どもの研究室に土橋文庫が寄贈されています。私も興味をもっているのですが、水田氏は「撰津名所図会」にある「伊藤東涯先生講筵を闡くの図」を紹介されています。その

なかで欄間に掛かっている「含翠堂」の額が、三宅万年書の本額とは異なることを、さらりと指摘されていますが、その通りで、この額は別のもので、ずいぶん傷んでいます。保存されています。このような確かで貴重な指摘が、この本には随所にみられます。一般の書店に市販されていませんので、版元の中尾松泉堂か中尾書店にて、購入していただければと思います。

なお水田氏と梅谷文夫氏の共著『富永仲基研究』（和泉書店）も刊行されています。仲基は懷徳堂からはなれましたが、父の芳春は懷徳堂創設五同志のひとりで、仲基の思想も懷徳堂を離れては考えることのできないものです。この本は、仲基研究の基本的文献として、ここでも紹介しておきます。

頼 祺一『近世後期朱子学派の研究』（溪水社 A五版 五九

四頁 定価八千円）

頼氏は、竹原・頼氏の流れをくむ近世思想史家ですが、本書は頼家につたわる史料によって、近世中期における朱子学派の形成を解明された研究書です。そして頼春水・同杏平・尾藤二洲・古賀精里に焦点をあてて分析されています。彼らは寛政異学の禁に関係した人物ですが、その朱子学への接近は、大坂における学問修業のなかでおこったこと、ここでは春水が懷徳堂所蔵の「大日本史」を筆写したように、懷徳堂とも深い縁があったことなどを明らかにされています。このように本書は懷徳堂研究にとっても重要な内容をふくんでいますし、とくに巻末につけられた頼春水在坂期書簡は、当時の大坂の学芸界の事情を知る上で必読の文献といえます。御一読をおすすめいたします。

（脇田 修）